



2015. 3. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 折れない心で立ち直る女性たちを支援 ……1~2
- アーサー・ピナードが語る「日本語を取り戻す」 ……3
- 私のおすすめ本「サルでもわかるTPP」 ……3
- プロジェクトをより良いものにするために ……4
- ネパールの教育事情 ……5
- カンボジア織物シリーズ その3 ……5
- あれから約一年 ……6
- あなたは隣国に友人がいますか? ……6
- よこはま国際フォーラム2015 ……7
- 気仙沼から ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8

折れない心で立ち直る女性たちを支援

地球の木は今年度から新しいプログラムとして、カンボジアの家庭内暴力やレイプなどの被害を受けた女性の支援を始めました。世界を見回しても、アフリカや中東、そして近くはアジアの国々で女性が虐げられ理不尽な目にあっているニュースに事欠きません。時代はこんなに進んでいるのに、です。今号は、このプログラムの担当理事である古田麻利子さんに、この支援に取り組むことになった経緯やカンボジアの女性の現状などを聞きました。

Q1 小さい時から海外で暮らしたそうですが、カンボジアとの出会いは?

古田 私は4歳から発展途上国で育ちました。父はODAの仕事で南太平洋の国トンガの飛行場を造り、その後も中東や東南アジアで橋や道路建設に携わっていました。そんな父を見て小さな頃から漠然と「支援」に携わりたいと思っておりまして。大学時代は識字率の低い地域での絵の役割「壁画」を勉強し、研究としてメキシコに進学、その後2004年、引退前の最後のプロジェクトに関わる父を訪ねて訪れたのが、カンボジアとの初めての出会いです。

Q2 地球の木と出会い、そして活動しようと思ったのはどうして?

古田 カンボジアでは、国連のいくつかのプロジェクトに携わりましたが、それはリサーチとPRに関するものでした。それも大切な仕事なのですが、私はもっと人と人がつながる「支援」に関わることができたらと思い、今はフェアトレードという分野で働いています。そして2年前、地球の木と出会いました。地球の木の海外支援の根本理念には「地球市民として」というのがあり共感しました。父が行ってきた日本が途上国に行く「支援」は、政治的な背景は複雑かもしれませんが多くの途上国の人々の生活に役立ってきました。しかし父がよくこぼしていた言葉は「あの橋は今どうなっているかな」でした。父と支援国との関係はかきこまった「ありがとう」で終わる2年ほどのプロジェクトでした。私は、ODAのような「寄付する・造る」→「ありがとう・さようなら」ではなく、現地の人と一緒に取り組める何かができ



CWCCのスタッフたちと。右端が古田麻利子さん

プログラム名：カンボジアDV/レイプ被害者支援
 現地パートナー：Cambodia Women's Crisis Center
 (CWCC,カンボジア女性緊急救済センター)
 支援内容：保護シェルター（6か月間の生活費、識字教室、
 職業トレーニング含む）
 心のサポート（カウンセリング）
 法的サポート（訴訟のためのサポート、証拠集め）
 小規模事業開始の支援、雇用の創出

ないかと思い、現地のソーシャルワーカーさんに相談して紹介されたのがCWCCでした。

Q3 現地パートナーのCWCCについて教えてください。

古田 CWCCはカンボジアで初めての女性シェルターで、1997年に設立されました。シェルターはカンボジア国内に4カ所（プノンペン、バンテアイ・メアンチエイ、シムリアップ、コンボントム）。シェルターに来る女性は、レイプ、DV（家庭内暴力）、人身売買被害者の三つに分けられます。しかし、シェルターは助けを求めて逃げてきた被害者全員が過ごす場所ではなく、CWCCの弁護士により訴えを起こした女性のみが法的処置が終わるまで過ごす場所です。自分たちが声をあげ訴えることによって、社会にDVやレイプの問題を知らせ、女性の権利を守る法を整えるきっかけをつくることを望んでいる女性なのです。

Q4 CWCCのシェルターがただの逃げ場ではなく、「勇気をもって訴えると決めた人を守る場所」というのが大事な点ですね。日本などより格段に険しい被害者の立場が同われますがー

古田 2013年の国連リサーチではカンボジア政府としても見逃せない結果が公になりました。カンボジア男性の5人に1人が女性へのレイプ経験者であり、その半数以上が20歳以下の若者である。また結婚相手に対するDV経験者は64%にも上るといふもの。カンボジアの田舎に住む女性にとって、男性を訴えることは大きなリスクです。識字率の低い世代は職に就けず子どもを失うか、また村から追い出される可能性も高いのです。2013年のCWCCのレポートによると、プノンペンの保護センター（一時相談所）に来た女性とその家族は166人。その内124人がシェルターに移動して法的サポートを受けました。プノンペンのような都市では訴えるケースが増えましたが、コンポントムなどの地方州では136人中13人のみで、残りの人は示談、あるいは泣き寝入りを強いられた形になります。田舎では警察が買収されるなどの理由で被害の立証が難しいケースが多く、またDVについても、仏前結婚式のみで結婚証明書がないなど、明らかに女性に不利な状況のようです。

Q5 シェルター運営のほかにCWCCが行っていることは？

古田 CWCCの役割は「予防」「保護」「弁護」の3つ。「予防」という面で、村ごとに「家族の形について話し合う」ワークショップを行っています。ポルポトの恐怖政治の時代に親と引き離された子どもたちは、家族がどうあるべきか分からないまま育ちました。そういう人が大人になって家族を持つと、時に家族のメンバーは虐待の対象になることがあるそうです。もう一度、お互いを尊重し合う家族を取り戻すためのワークショップはとてもよい結果を残しています。

Q6 地球の木では昨夏、「保護」シェルターに支援金を届けましたが、今後、私たちができそうな支援はどんなものが考えられるでしょうか。

古田 CWCCを支援するにあたって、当初ソーシャルワーカーの人に「レイプやDVはとてもセンシティブな分野だから、支援者へのアピールが難しいのでは？」と言われました。

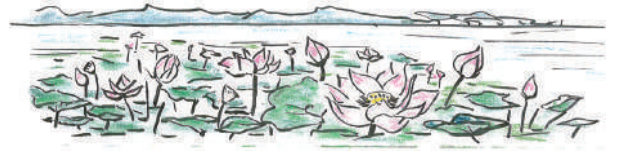


しかし地球の木の会員は多くが女性ですし、女性として意見を持ち多くの経験を積んで来られた方々と思います。カンボジアの勇気ある女性たちの声が聞こえ、一緒に考えていけると信じています。

CWCCでも、時代に合った職業支援が

渋滞のプノンペンでは自転車が一番と古田さん

求められています。都市部と地方では職業として有効な技術もずいぶんと違っています。カフェやお菓子の販売が人気のプノンペン、地方で根強く人気なのが農業（豚や牛の飼育）。\$100前後で屋台を始める女性。マシン1台の小さなテ일러を始めると\$200。そして事業ではなく就職を望む女性。高校や大学に進学して、子どもを守るNGOに就職する子もいる。地球の木では、現地からのリクエストとして、新たにカフェ・ベーカリートレーニングやアートセラピーなどに携わっていく予定です。支援金を届けるだけでなく、是非会員の皆さんの声も届けたいと思っています。カンボジアの支援をするのではなく、彼女たちがカンボジアの社会を変えるのを支援する。そして彼女たちがもう一度立ち上がり、新しい一歩を踏み出すのを見届けたいと思います。興味のある方、ご連絡下さると大変嬉しいです。



立ち直る女性たち

■私は少しずつ心を開きました

私が13才の時、母はデンマークの男性に私を売りました。私は警察によって救い出されて、2009年10月にCWCCを通して、安全な避難所へ連れて行かれました。私はとても怖くて一人ぼっちだと思っていて避難所での活動にも参加せず誰とも接したくありませんでした。カウンセラーとの会話はそんな私を助けてくれました。そして、私は少しずつ心を開きました。私は今、このことが裁判になるのを待っています。母とデンマークの男は今、刑務所にいます。

■今は小さな裁縫店を経営しています

私の夫は2人の子どもを残し戦争で亡くなりました。再婚した夫は、時間がたつと2人の子どもが働かずに学校に行っていることを怒り、虐待し学校をやめさせ家から追い出しました。

私が彼を拒否したり、非難すると、夫は私と彼自身の3人の子どもたちを虐待して、働く代わりに、飲んで、毎日私を強姦するのを決して止めませんでした。私は、恐怖のどん底でした。2009年10月に、私は、3人の子どもたちとCWCCに来て、離婚を求めることに決めました。娘と私は安全な避難所で縫物を習いました。その時私の夫は、離婚を望みませんでした。裁判所である時、彼はとても恥じていて、私を見るのができませんでした。彼は、自分のあやまちを謝罪しました。

私たちは裁判所内で時間をかけ調停プロセスを始めました。今は娘と私は避難所から戻りCWCCからのローンで小さい裁縫店を経営しています、そして少しずつ返済しています。現在は、ずっと平和な状態で生活し、縫物をする事により以前より生活も楽になりました。

(CWCCホームページより)

*3月24日、地球の木カフェでDV/レイプ被害者のプログラム報告会を行います。詳しくは8ページをご覧ください。

アーサー・ビナードが語る 日本語を取り戻す

2月15日(日) 開港記念会館にて

アメリカ・ミシガン生まれで、日本での生活がすでに25年になるといふビナード氏。日本語で詩を書き、翻訳をし、絵本を創り、講演ではダジャレも交えて大いに笑わせながら日本語と英語を駆使して語る、その頭の中はいったいどうなっているのか?…でも、それは「特定秘密!」なのだそうだ。

地球の木講座に登壇するのは昨年が続いて2回目。今年はいきなり「地球の木」という名前のお話から英国童話「ジャックと豆の木 Jack and the Beanstalk」へ。目から鱗の「豆」知識から、自ら「美納豆(ビナード)」と称するほど好きな納豆へと話は進みます。日本には発酵食品文化がある。言葉も人々が発酵させ熟成させ育てるもの。今の日本はそれを失ってしまう危機に直面している…。ビナード氏の語りも熱を帯び、聴衆を引き込んでいきます。



講演後、著書にサインをするアーサー・ビナードさん



絵：ティム・ホブグッド
訳：アーサー・ビナード
出版：岩崎書店

文：宮沢賢治
訳：アーサー・ビナード
絵：山村浩二絵
出版：今人舎

今回のテーマは、ビナード氏のこのような危機感から生まれました。例えば、「積極的平和主義」という言葉。本来の「positive peace」は、構造的な暴力や貧困、不平等の解消に取り組み、紛争の根本原因をなくすこと。時の権力に都合のいいように作り替えられ、上から押しつけられた言葉は、まさに「きれいな包装紙」。その中身を覆い隠し、人を騙し、本物の言葉を駆逐していきます。そして、その先にあるものは…。そうならないようにするには、私たちの言葉を私たちの手に取り戻す。自分たちの言葉をゆっくり発酵させ熟成させ、味わい育てていけば、偽物の言葉にも気づくことができ、その偽物をばらまいている背後にあるものにも気づくことができるでしょう。これは、ビナード氏が生まれ育った米国でも同じ。TPPは「とんでもないベテなパートナーシップ」と笑わせながらも、その内容の深刻さを思い知らせてくれました。

また、宮沢賢治の「雨二モマケズ」。奉仕の精神の道徳教材みたいに扱われるけど、とんでもない! 本当は豊かな里山を背景に熟成された言葉たちで紡ぎ出されている作品であることを、自ら英訳した絵本「Rain Won't」を手に熱く語ってくれました。そして最後には、ルイ・アームストロングの「What a Wonderful World!」を邦訳した歌える絵本「すばらしいみんな」を手に、自ら歌うというサービスに、会場は拍手喝采となりました。英語と日本語、日米の社会と歴史に対する造詣の深さを駆使し、聴く者に勇気と力を与えてくれた2時間でした。

(地球の木講座2015実行委員 斎藤 聖)

私のおすすめ本

サルでもわかるTPP

TPP ってよく聞くけれど、なんだかよく分からない…と思っているあなた。3文字のアルファベットに隠された、とんでもない、ベテに満ちたパートナーシップの内容、そして、その恐ろしさが「ストン!」と落ちるおすすめ本です! ホームページでも全編を見ることができます。

Project99%

検索

安田美絵さん

料理家・市民活動家。マクロビオティック料理教室主宰。食と健康、農業、貿易などの関係を調べるうちに、大企業の数々の悪事を知り、世間の大部分の人々が搾取されているのにそれを全く自覚していない現状に気付く。



著者：安田美絵
出版：合同出版

プロジェクトをより良いものにするために

地球の木会員のみなさん、こんにちは。前回の会報では、ラオス事務所現地代表の林より、2014年8月の中間評価をどのように行ったのか、報告しました。今回はその補足説明と、その後の動きについて報告します。

●● 色々な角度から評価する

経済開発協力機構の開発援助委員会が定めた評価5項目…妥当性・有効性・効率性・インパクト・自立発展性も用いてプロジェクトを総合的に評価したことは前号で林がお伝えした通りです。少し詳細を説明すると、例えば、ラオスでスポーツ振興支援をするのに、教え上手な元プロ選手を呼んで良い道具を供与しても、野球は広まらないかもしれません。この場合は「妥当性」が問われます。また、JVCではJVCが大切に考える価値観に基づき、公平性・透明性・参加度の3項目も用いて評価を行っています。これらの項目は、例えば透明性であれば、JVCラオス内での意志決定が透明であったか、といった事柄にも適用されます。どうしてあっちの活動の予算の方が大きいのだ、といったスタッフの本音も噴出しえる、真剣な議論の場になります。

●● 村人とのコミュニケーション術の向上のため

このように評価を行うわけですが、とりわけ中間評価では事業の残り半分においてどのように改善を行っていくか、その方法を探ることが最大の目的になります。そのため、評価終了後全スタッフで現在問題だと思う点、その原因と思われること、どのように改善すべきと思うか、といったことも話し合いました。しかし、原因についてはなかなか推測の域を出ないものだったりもします。このため、村人とのコミュニケーション術の向上の必要を感じたJVCラオスでは、日本より講師を招き、具体的な質問をすることで“村人の実際”を引き出す技術についての研修を行いました。最初に教わったのは、“感情”と“考え”と“事実”の違いについて。「朝ごはんは何派？」「ご飯がいいね」これは“感情”、「普段朝ごはんは？」「ご飯だね」これは“考え（願望混じりの思いこみ）”、「今朝と昨日の朝は？」「今朝は昨日作り過ぎたおでん、昨日の朝は時間がなくて菓子パン」…ここ2日ご飯ゼロ、これだけが“事実”。スタッフはかなり刺激を受けたようです。

●● 質問の仕方ひとつで……

「意識啓発演劇は有意義でしたか？」と聞けば礼儀正しい村人は「有意義でした」と答えます。そのような質問ではなく、「演劇のことを誰かに話しましたか？」と聞くと“実際”が分かります。



村人に意識啓発演劇について聞くスタッフ

*意識啓発演劇：意識啓発ドラマとも。村人に自然資源管理や土地に関わる身近なことを知って、考えてもらう事を目的に、分かり易い演劇や人形劇といった手段を用いている。

(JVC東京事務所ラオス事業担当 平野 将人)

研修の実践で試しに聞いてみたときは、「田んぼの近くに寝泊まりして参加できなかった家族に、演劇の筋を全部教えたよ！」と目を輝かせて言ってくれた年配女性が印象的で、意識啓発演劇の効果を感じました。一方で拡大に行き詰っているSRI（幼苗一本植え）では、これからこの技術を使ってその原因を探っていくかといけないういでしょう。

このように、JVCラオスでは評価技術そのものの向上も含めて、事業をよりよいものにすべく日々邁進しています。

ネパールの教育事情

SLCという「鉄の扉」



SLC合格祝い

毎春3月下旬の一週間は、ネパール全体が緊張に包まれる。全国一斉に、SLC (School Leaving Certificate: 中等教育修了認定試験) が行われるためだ。受験会場となる学校では、受験生が教室の中で試験を受ける間、不正を防ぐために、多数の守衛や軍人によって警備され、学校の外には受験者の数より多い保護者たちの人垣ができる。まるでお祭りのような騒ぎとなる。

ネパールの現行の学校制度は、小学校5年、中学校3年、高校2年の10年制となっており、10年生の修了後に受けるのがSLC試験である。SLCに合格すれば、小学校教員や公務員に就く資格を得ると同時に、その後の「10+2」(テン・プラス・トゥ)と言われる2年間の専門課程に進学することができる。また、SLCの成績は一生ついて回る。成績上位者から希望の大学や学部優先的に入ることができ、医学部などは75%以上の合格点が必要とされる。企業やNGOへの就職もSLC取得が最低条件となっている。

それほどネパール人の一生を左右する試験であるにも関わらず、近年、SLC合格率は下がっており、2014年度は43.9%と半数にも満たなかった。「Iron Gate: 鉄の扉」と呼ばれるゆえんである。この扉を開けなければ立身出世は望めない。昨年は7人の女生徒が不合格を苦に自殺した。親が無理をしてでも自分を学校に行かせてくれたのに、その期待に応えられなかった自分を責め、追い詰められたのだらうと言われている。

不合格者の大半は、田舎の貧しい生徒、女子、ダリット(不可触民)、障がい者である。また、私立校の合格率が93.26%であるのに対し、公立校は28.19%と、その差は歴然としている。地球の木が教育プログラムを行なっているマンガルタール村でもSLCの結果が教育効果を計る重要な指標となっている。「不合格者がいるということは、教育者の責任であり、民族や性別、宗教、地域による格差をなくしていくことが教育者の役割である」と現地コーディネーターのサルバジットさんは言う。(ネパールチーム 磯野 昌子)

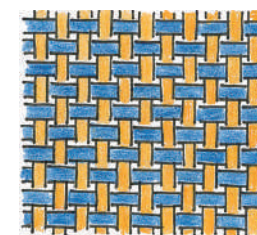


ラジャバス高校でのSLC合格者たち

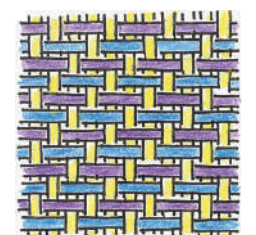
カンボジア 織物シリーズ その3 絹緋布 クメールシルク

■ 絹緋布

カンボジアの織物のクメールシルクと呼ばれる絹緋布は、世界の織物の中でも特にユニークな織物です。普通、緋は平織りで織られますが、カンボジアでは綾織りで織られています。綾織りの技法で織ることにより、経(たて)糸に対して緯(よこ)糸が表面に2倍の量が見えるようになっています。これは、よこ糸を括って柄を表現しているため、よこ糸に染まった柄が、たて糸に干渉されず、ぼやけずにきれいに見えるようにという工夫と思われる。しかし、綾織りは平織りに比べて織る手間が格段に増えます。繊細な絹緋布、クメールシルクには、カンボジアの人々の美しいものを作りたいという情熱が感じられます。



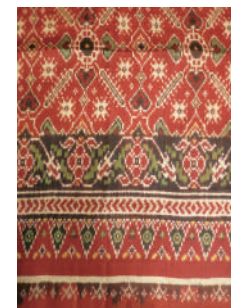
平織り



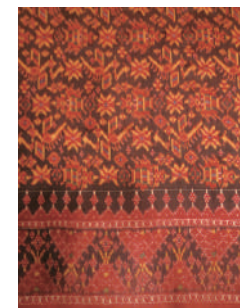
綾織り

■ 日本に伝播した緋の技術

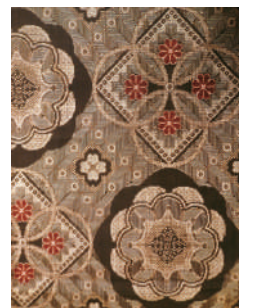
緋の発祥はインドです。緋の技術は、海のシルクロードによって、ビルマ、カンボジア、マレーシア、インドネシア、フィリピン、琉球、日本と伝わっていきました。技術だけでなくデザインも伝わっていき、各国でその国らしさが加えられました。写真はインドのパトラ、クメールシルク、日本の大島紬です。沖縄と鹿児島の間にある奄美大島の織物、大島紬は、中でも龍郷(たつごう)村の龍郷柄が有名です。龍郷という地名にカンボジアの龍にまつわる建國神話を思い出します。日本は、インド、ペルシャからつながる海のシルクロードの終点として、中継地となったカンボジアの影響を受けながら、日本独自の織物を発展させた国と言えるようです。(クメールシルクチーム 大藪 明恵)



パトラ (インド)



クメールシルク (カンボジア)



大島紬 (日本)



台風22号で出荷前のバランゴンバナナに被害（パナイ島）

「ヨランダ」がフィリピンのレイテ島やパナイ島などに大きな被害をもたらしたのは、2013年11月8日のことでした。1年前の会報でパナイ島ネグロス島の被害状況、そして地球の木の募金が「NPO法人APLA」を通じて、バランゴンバナナ生産者の復興支援に使われることをお伝えしました。その復興状況を知っていただくため地球の木では、2015年1月28日に報告会を開催しました。報告者には「(株)オルタ・トレード・ジャパン」の小林和夫さん、「APLA」理事（地球の木会員）の広瀬康代さんをお招きしました。会を決めた時点では復興の成果を語っていただくつもりでしたが、その後2014年11月、12月の台風で、バナナ生産者に再被害の出ていることを知り、複雑な心境で報告を聞くことになりました。

パナイ島を中心に行われた復興の内容（台風再来襲前）

- ・バナナ約35,000本の新たな植付
- ・肥料として鶏糞112t、マッドプレス（サトウキビの搾りかす）40t、ミミズ堆肥の研修とミミズ10kg配布
- ・主に自家用に野菜種（カボチャ、ダイコン、オクラ、ニガウリなど）配布
- ・農業用に手押しポンプ、自転車型揚水ポンプ計9基設置、シュレッダー1台、山刀、スコップ、穴掘り棒、鋤など配布
- ・ほとんど収入の望めない生産者に、バナナ施肥作業1株につき15ペソ（約35円）支給

本格的出荷目前に、 またまた台風はやって来た

昨年二つの台風「クイニー」（11月28日）「ルビー」（12月7日）によりパナイ島、ネグロス島、ボホール島の出荷間近な実を付けたバナナが被害を受けました。回復にはさらに6ヵ月程かかる予定で、再復興のため見舞金配布、肥料配布、農業用水施設整備などが引き続き行われる予定です。これらの費用は、ヨランダ募金の残金やEUのフェアトレード団体からの募金を充てたいとのことでした。最後に、次世代の若者が複合農業や地産地消を学ぶネグロスの循環型農場の話がありました。台風の来襲が想定内となる状況で、このような取り組みがますます重要になると感じました。

（たうんチーム・元フィリピンチーム 米林 大作）

あなたは隣国に友人がいますか？

日本と朝鮮半島を子どもたちの絵画で繋いできた「南北コリアと日本のともだち展」は、2014年で14回目。当初参加していた小学生は、大学生や社会人となって活躍しています。久々の日朝会談の開催で関係改善への期待が高まっていた夏、平壤で8年ぶりに絵画展を開催したのですが、14年の歴史を実感する出来事がありました。通訳として同行した平壤外国語大学日本語学科の学生が、絵画展の協力校である平壤市ルンラ小学校の卒業生だったのです。一年にほぼ一回しか訪問できないため、平壤の子どもたちは私たちにあって一期一会。成長した卒業生に再会するのは奇跡的です。「私がこの絵画展に出品したとき日本人に初めて出会って、進路を決めるとき日本語を学ぼうかなと思ったんです」と話す明心（ミョンシム）さん。絵画展を手伝うだけでなく、日本から訪問した大学生と密な時間を過ごし、子どもの頃の体験が花開いた一週間だったのではと思います。

この日朝学生交流に参加した日本人学生が語るトークセッションを、12月に東京のこどもの城で開催、4名の学生が登壇しました。2回目の参加となる塚田さんは、小学生の頃「どんな子たちが描いているんだろう」と絵を見ていた一人。前回は「初めての北朝鮮」を受け止めるだけで精

一杯でしたが、今回、子どもの頃に平壤で同じ体験をしていた明心さんに出会い、また前年に交流した学生とも再会し、ニュースの中の北朝鮮が「友人のいる場所」にぐっと近づいたといいます。一方で、友人だと思うからこそ、日朝間の意識の違いを痛感しても率直に切り出せないジレンマも。それでも「違いは簡単に乗り越えられない、互いを気遣える友人がいるのが貴重なこと」と語る学生たち。違いは受け入れたくない！というヘイトスピーチの風潮を乗り越える、実感のこもった力強い言葉に、会場からも大きな拍手が起きていました。

（南北コリアと日本のともだち展実行委員会事務局 寺西 澄子）



日朝大学生交流も3年目。短時間でも多くの学びがある

よこはま国際フォーラム2015

今年も、2月8日JICA横浜で開かれた「よこはま国際フォーラム2015」に参加。これを機に、ワークショップ「未来の食卓」の現在に至るまでの道のりを振り返ってみました。

ワークショップの教材作り

数年前、DEAR（開発教育協会）主催の「地球の食卓～フードマイレージ」というワークショップに参加。各国30家族の食卓を写した写真から、文化の多様性やグローバリゼーションについて学び、フードマイレージをテーマにして、日本の食を取り巻く状況やその原因を考え、新たな視点から食生活を見直すものであった。

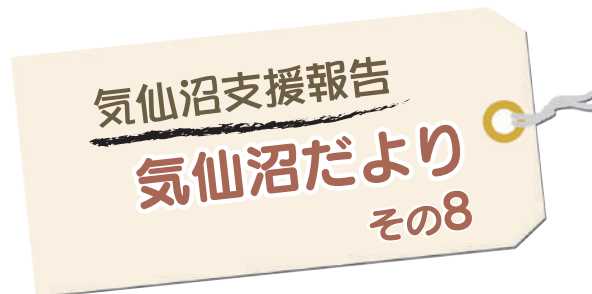
出前講座チームでは、すでに「マジカルバナナ」「ネパール・タルー族の家族ゲーム」などのワークショップを実施していたが、新教材を模索している時でもあったので、これを参考に「地球の木」らしいものを作ろうという機運が高まった。「お米が食べられなくなる日が来る」というDVDも主食のお米を考えるきっかけになった。国の政策と共に変化してきた米をテーマに展開すれば農業や食の問題に切り込めると考えた。最初は、2012年12月に「地球の木」内で発表。その後、何回も検討を重ね、修正しながら、各地でワークショップを実施。内容はその都度参加者に合わせ皆で修正し、DVDを省き、食全体を見直す方向に変えた。

現代の食卓は世界中からの輸入品であふれ、環境に負荷をかけ、食文化にも大きな変化をきたしている。自給率、食の安全、その他多くの問題もはらんでいる。現状だとこうなる、これからどうする、に焦点をしぼる方向で、タイトルは大きく「未来の食卓」とした。



ワークショップ「未来の食卓」

「ワークショップ」形式は参加をためらう向きが多い。自主的に5～6回実施したどの会も参加者集めに苦労した。「ワークショップって、何かを作るのかと思って来た」「発言に自信がない、慣れていない」などの意見もあるがいったん始めると徐々に活発な意見が出て、こちらが思いもかけなかった面白い展開になることが多い。このようなワークショップ、ぜひ皆さん、一人でも多く参加していただきたいと思います。（出前講座チーム 山崎 信子）



被災地と全国をつなぐ インターネット放送 応援を！！

「復興支援まつり」

地球の木が応援しているTreeSeedの小野寺代表らが、昨年11月29日(土)に横浜の山下公園おまつり広場で開かれた「復興支援まつり2014」（地球の木も実行委員会の一員）に参加しました。「忘れない」「ずっとつながる」をめざしての2回目の開催でした。今回も好評だったフカヒレスープで来場者たちを温め、気仙沼をアピールしました。

「スポンサー募集中！」

いろいろな活動をしているTreeSeedですが、「被災地と全国をつなぐインターネット放送」を計画中です。テレビなどでの被災地の情報量が減ってしまった現在、全国の応援して下さる方々にリアルタイムでの現状やイベント情報をお届けし、一緒に復興の過程を応援していただければと願っています。

そのインターネット放送局開局にあたりスポンサーを募集しています！

ご協力いただける方は、メールでお問い合わせください。

特定非営利活動法人 TreeSeed

E-mail: npotreeseed@yahoo.co.jp

活動日誌（12月～2月抜粋）

12月

- 1日 第4回理事会
- 4・5日 緑園デポー展示会
- 6日 サロン「カフェ・らお」（ラオスチーム）
- 10～27日 外国人学校の子どものための絵画展（横浜中央図書館）
- 18～21日 南北コリアと日本のともだち展（青山こどもの城）
- 10/1～12/30 元町トミーにてフェアトレードグッズ販売

1月

- 9日 かめのり賞表彰式
- 13・14日 ちがさきデポー展示会
- 27日 第5回理事会

- 28日 フィリピン「ヨランダ台風」報告会
- 28・29日 つつじが丘デポー展示会

2月

- 8日 よこはま国際フォーラム2015「未来の食卓」で参加（JICA横浜）
- 15日 地球の木講座「アーサー・ピナードが語る 日本語を取り戻す」
- 17日 第6回理事会
- 23・24日 つなしまデポー展示会
- 26～3/2 カンボジア訪問
- 28日 出前講座「マジカルバナナ」（桜丘学習センター）

第16回地球の木総会のお知らせ



日 時：5月30日（土）13：30～16：30
場 所：オルタナティブ生活館2階オルタリアン

※詳細は同封の「第16回地球の木総会のお知らせ」をご覧ください。



幸せ分かちあい年末募金 ご協力いただきありがとうございました

今年も会員の皆さまをはじめ、80名を超える方からご協力をいただきました。皆さまの温かいお気持ちに感謝いたします。

年末募金総額 453,400円

<寄付先別内訳>

- ・ネパール 幸せ分かち合いムーブメント 31,300円
- ・ラオス 森林と農業プログラム 22,300円
- ・カンボジア クメールシルクプログラム 12,300円
- ・カンボジア DV/レイプ被害者支援 13,300円
- ・東日本大震災 気仙沼支援 64,300円
- ・無指定 309,900円

※2014年にいただいた寄付領収書を2015年2月10日までに発送いたしました。ご不明な点がありましたら、地球の木事務局までご連絡ください。

「かめのり賞」受賞！

1月9日表彰式が行われ、筒井事務局長が出席しました。かめのり賞は、公益財団法人かめのり財団が日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・交流の促進や人材育成に草の根で貢献し、今後の活動が期待される個人または団体を顕彰しています。28の応募の中から9団体が賞をいただきました。



賞金は、地球の木の支援プログラムのために有効に利用いたします。

地球の木カレンダー2015 ご協力をありがとうございました

今年は、729冊ご購入いただきました。カレンダーの収益は、ネパール・ラオス・カンボジアの支援に使われます。みなさまのご協力に感謝いたします。

フェアトレードチームメンバー大募集！

フェアトレードに関心のある方、手作りが好きな方、アジア雑貨の好きな方、一緒に活動しませんか。フェアトレードチームのメンバー（ボランティア）を募集しています。企画から販売までを行うチームです。お問い合わせ：地球の木事務局（担当：筒井）
045-228-1575

国内スタディツアー 「持続可能な地域どう作る」

昨年のツアー「農的くらしって何？」に続いて第2回目は、相模原市で持続可能なまちづくりに取り組む「トランジション藤野」をたずねます。

日 時：4月12日（日）午前9時40分

JR中央線藤野駅集合

午後5時頃解散

内 容：「トランジション藤野」の紹介、森部・藤野電力見学、地域通貨「よるづや」紹介など

参加費：3,500円（別途昼食代）

定 員：15名

申 込：地球の木事務局 045-228-1575

E-mail:chikyunoki@e-tree.jp

※詳細は、同封のチラシまたはホームページをご覧ください。

あーすフェスタかながわ2015

日 時：5月16日（土）17日（日）10：00～16：00

場 所：神奈川県立地球市民かながわプラザ

（あーすプラザ）

横浜市栄区民文化センター（リリス）

JR根岸線「本郷台駅」徒歩3分

多文化共生社会の実現に向けて互いを理解する機会をつくるため毎年開催されています。今年で16回目をむかえます。世界の民芸品、フェアトレード・グッズなどの販売、各国の料理を提供する世界屋台村が催されます。

オープンオフィス 地球の木カフェ

日 時：3月24日（火）11：00～18：00

場 所：地球の木事務局

■11：00～12：00プログラム報告

「折れない心で立ち直る女性たち」古田麻利子さんがカンボジアでのDVやレイプ被害者が立ち直る支援をしているCWCCの活動と現状報告をいたします。

■フェアトレード品の販売、地球の木カレーもあります。新作の春物クラフトも入荷しました。

参加費：1,000円（地球の木カレー、コーヒー、デザート付き）

申込み：地球の木事務局

045-228-1575



会員・ボランティアを募集しています。